

塩見岳

●三伏峠〜塩見岳

▽75年12月 日〜76年1月 日

▽C L 杉澤康秀 (26) 毛利哲也

(42) 山口 清 (31) 杉山 達

(20) 大橋 孝 (18)

解説 この年は塩見岳で取組れたが、会の記録は残っていない。

下山日三伏峠で、仙丈岳より縦走してきた後藤、荻野パーティーと出会った。

第4期冬山合宿

3192m

弘法小屋尾根

後藤 隆徳

●荒川谷〜間ノ岳弘法小屋尾根

間ノ岳〜農鳥岳〜北岳〜吊尾根

▽76年12月29日〜77年1月2日

▽C L 後藤隆徳 (29) S L 杉澤康

秀 (27) 写真毛利哲也 (43) 8ミ

リ山口 清 (32) 記録杉山 達

(21)

【とりくみ】

1、76年6月後藤私案をまとめる。

2、7月3日〜4日に後藤単独で

弘法小屋尾根を登り偵察した。

3、8月、弘法小屋尾根〜白峰三

山縦走を三島労山冬山合宿に決定。

4、9月17日〜19日に山口、荻野、

大橋、杉山は弘法小屋尾根を登り

北岳まで縦走した。

5、10月8日〜11日に後藤、杉澤

山口、荻野はボーコンの頭、間ノ

岳、弘法小屋尾根に荷上げた。

6、10月9日〜11日に毛利、杉山

小川 (広) は弘法小屋尾根に荷上

げして、北岳まで縦走した。

7、12月17日〜18日後藤、竹端、

杉山は荒川谷を偵察した。

私は30歳になるまで、結婚する

まで南アルプスの主な山々を厳冬

期に全部登頂するという目的を

持って早くも3年の歳月が流れた。

茶臼岳、上河内岳、聖岳、赤石岳、

東岳、中岳、千枚岳 (荒川岳)、

仙丈岳、三峰岳、塩見岳、甲斐駒

ヶ岳、薬師岳、観音岳、地藏岳

(鳳凰三山)、北岳はすでに足下

になっていたが、白峰三山の間ノ

岳と農鳥岳は未登であった。

昨年仙塩尾根を縦走後、頭に

あった問題は、ここをどのルート

から登るかであったが、北岳から

ピストンはしたくなかったし、魅

力もなかった。

三島労山入会后、竹端と親しく

なり、今まで知らなかった山の話

を多く聞かせてもらった。いろい

ろな話の中で興味を呼んだのが知

床の旅と、間ノ岳弘法小屋尾根で

あった。

弘法小屋尾根厳冬期登山は、私

が探し求めていたものにドスンと

ぶつかったような感じで、今年の

冬はこの尾根を狙ってみようと決

心させたものだった。

そして久しぶりに燃えている自

分が良く分かった。

12月29日 (晴) 気温不明

△タイム▽先発下土狩10:05〜荒

川伐採小屋15:00〜後発沼津14:

25〜伐採小屋17:30 (泊)

達橋に借りたチェリー1200

で私は三島駅に杉山を迎えに行く。

天気は快晴。下土狩車で杉澤好、

達橋らの見送りを受けて山に向か

う。奈良田に向かう途中、車がア

クシデントを数えたが大事に到ら

ず再び出発。

奈良田付近は先々週下見に来た

ときよりだいぶ雪が多く、道路の

脇に10センチ位積もっていた。心

配していた内河内出合いのトンネ

ルにはやはり鎖が掛かっていた。

3人で鎖を上げてみたが、もう少し

という所で車は入れない。杉澤

が「まさかこんな所ないだろう

ナー」とトンネル入口の看板を上

げたら、何とそこに鍵があった。

そのことを後発隊に知らせよう

と少し戻って電話を入れたが、す

でに出発した後だった。入口の鎖

の所に置き手紙をして行く。荒川

までの道はきれいに除雪され特に

問題はなかった。後で分かった事

だが、除雪されていたのは、ある

き沢橋まで白ナンバーのマイクロ

バスがピストンしていたからだっ

た。車は発電所の中に入れて、

バッテリーを外し毛布につつんで

おく。伐採小屋に入り、飲んだり

食べたり後発隊を待った。小屋に

は夜叉神峠から歩いてきた若者が

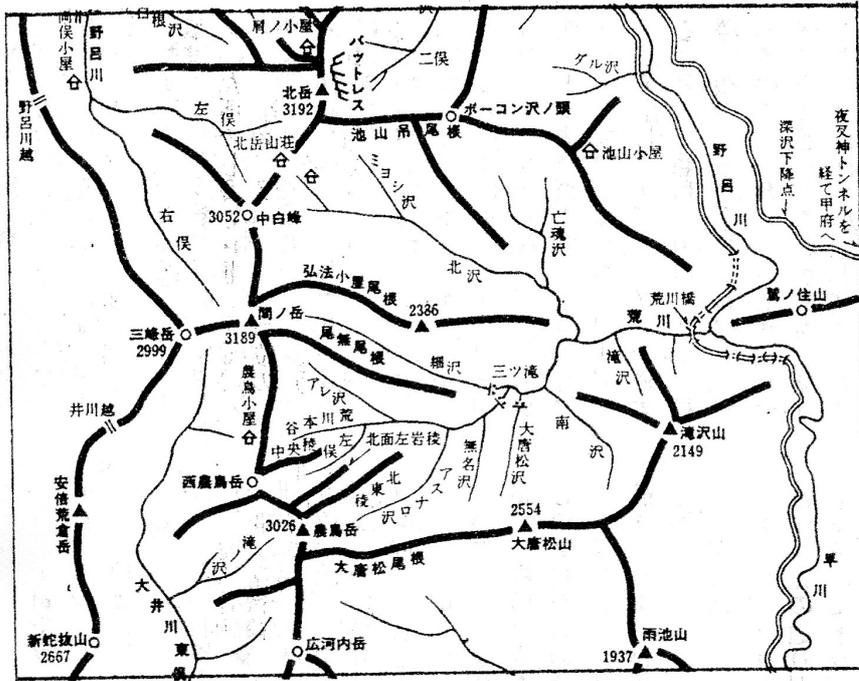
1人。17時30分頃、私はもう来る

頃だろうと窓から乗り出している

と、闇の中にヘッドランプを揺らしながら毛利、山口が到着した。5人揃ってひと安心。少し酒を飲み、大いに食って英気を養う。外は満点の星だった。

12月30日（晴のち雪）

気温マイナス17度



△タイムV起床1:50↓出発3:15
1峠5:40↓北沢監視小屋6:20
12386m峰11:00(泊)
簡単な朝食を済ませバックキングも終わり出発。ところが、杉澤が「アッ」と大声を出した。エスパースのポールを忘れてきたことを皆に告げた。忘れてきたと言われてもここから引き返す訳にもいかない。協議したが、何とかして行こうという結果になった。荒川橋からはどこかのパーティーだろうか、一条のトレースが闇の中に伸びていた。私達より早く入山したパーティーがいる様だ。北沢監視小屋の手前で夜が明けた。

ここから雪も多くなり、弘法小屋尾根取付で再びトレースに出会う。前のパーティーは荒

川谷を進行してきたようだ。全員快調。いよいよここから本格的な登りが始まる。

1時間程登った所で下山してきたパーティーに会う。京都医大山岳部で間ノ岳をピストンしてきたとのこと。天候はこの所ずっと不安定で良いのは今日位ですと言う。私は天候のことより上部のハイマツ帯が気掛かりでそれを聞くと、「イヤ、別に」と言うだけだった。私は「フウーン」と思った。やっぱり雪の量がかなり多い。つまり弘法小屋尾根は東側なので風が弱く降った雪がそのまま積もっているのだ。そして「これからですネー」の言葉が胸にズシッときた。そうだ確かにこれからだ・・・。

この頃より農鳥岳付近から雲が活発に流れ北岳にガスがかかり始めた。「こりゃあマズイ」と内心つぶやく。案の定しばらくして雪がチラチラしてきた。予定より早く2386mに着いた。だが天候は不安定だしパーティーも疲れているので本日はこれまでとする。

夕食は荷上げのおかげで大変おいしい食事をとれた。食べれば元気もでる。軽くホワイトを飲んでシユラフにもぐる。16時、23時と天気図をとるが良い材料は見当ら

なかった。

12月31日（雪のち風雪）

2386mマイナス14度
弘法小屋尾根マイナス20度
△タイムV起床24:00↓出発2:00
1間ノ岳10:50↓農鳥小屋12:25(泊)

天気図を取った後少し横になったが、目が冴えて眠れないので24時起きてコンロに火を入れる。テントが暖まると毛利も起きたので2人でコーヒーを飲む。毛利はあまり甘いものが好きでないらしく甘すぎるコーヒーに閉口している様だった。隣のテントも起きて朝食の支度にかかる。今朝は野菜、肉、インスタントライスを混ぜてオジヤを作る。毛利持参の梅干しがうまい。2時ちょうど2386mを後にする。外は雪がチラチラと降っていた。気温は昨日程なくマイナス14度で暖かい。樹林帯をヘッドランプの灯りを頼りに進む。雪が多いせいか夏の面影は全くなく、大体どこを歩いているのか見当がつかない。しかし、無雪期のようにブッシュに進路を妨げられる訳でなく快適そのものだった。樹林帯を抜けると雪が多くなりラッセルが厳しくなる。ルートを外すと胸までもぐり登れなくなる。

全員あえぎながら登る。まだ回りは真っ暗だ。こんな風にこんな所を我々が登っているなど誰が予想しよう。

胸までのラッセルを済ませて少し下った所で杉澤が尾根より逆さになって転落。尾根より2m位の所にいるが、逆さになっていっえ、傾斜が強いので仲々思うように起きれない。

だが、雪が軟らかくフカフカしていたので、大事には至らなかった。この辺りは両側がスパッと切れたナイフリッジなので落ち方が悪いと下まで飛んでしまう。夏にフィックスザイルがある場所ではザイルを出し、後藤トップで下降する。そして毛利、山口、杉山、杉澤の順で下る。全員ゼルブストがあるので、それにカラビナを掛けザイルに通す。それが最も安全な方法と思われたが、実際にはあまり良くなかった。トラバースなら良いが垂直方向ではプルージックを併用しないと効果はない。心配した通り、杉山がバランスを崩した時良く利かなかった。杉山が降りてきた時、彼のアイゼンが片方しかないのに気がついた。どこかで紛失した様だ。仕方がない。どうすることもできないのでそのま

ま行かせる。

再び全員でラッセルをしながら進む。トップ、セカンドは実に苦しい。独標の登りでは全員ゼイゼイしていた。この付近では両側がスパッと切れ風もあり実に気を使ふ。間ノ岳稜線のガスも切れ始め、北岳も姿を見せる。これで気持ちグッと楽になった。

ようやく最終コルに着き皆は写真を撮ったり8ミリを回したりけっこう忙しい。私は6×6の重たいプロニカを持ってきたが、結局、一枚の写真も撮れなかった。この尾根からの北岳はとにかく天下一品なのだが残念……。後は最終コルより稜線に向けてとにかく進む。あまりラッセルがきついで左に逃げて、岩稜ルートを狙うものの、上手にいかなかった。結局、元の通り沢をラッセルして上部を左にトラバースして岩稜の上に出る。そして事実上弘法小屋尾根を登りきった。

秋の荷上げ品回収に向かうが後藤、杉澤、山口とも記憶がハッキリせず回収に手間取る。杉澤、山口は随分見当違いの方向を指して「絶対ここだ」と主張する。彼等の所はいくら捜しても出てこない。ので私はもう一度下からゆっくり

捜す。初めここだと思った所がそうだった。ピッケルに「ガチッ」と一斗缶が当たった。毛利が例の調子で「お前ら少しだらしがないゾ」と怒鳴る。その通りだ。

荷上げ品を回収した。予定では今日はこの3千メートルの稜線で幕営の予定だった。厳冬期にここで一夜を明かすのは大変貴重な体験になるからだ。だが、ポールが無い。計画変更し、全員一斗缶を背負って農鳥小屋に向かう。全員非常に疲れていた。足を引きずって歩く。風が冷たかった。杉澤が勝手に三峰岳に向かって下りだす。間ノ岳頂上付近は地形が複雑なのだ。ようやく農鳥小屋に着いたが予想通り閉じていた。後藤、毛利、杉山は近くにあって雪洞。杉澤、山口はテントに泊まる。雪洞は少し直してエスパースの内張りをしたのでとても暖かかった。16時の天気図は少し良い方向と判断した。

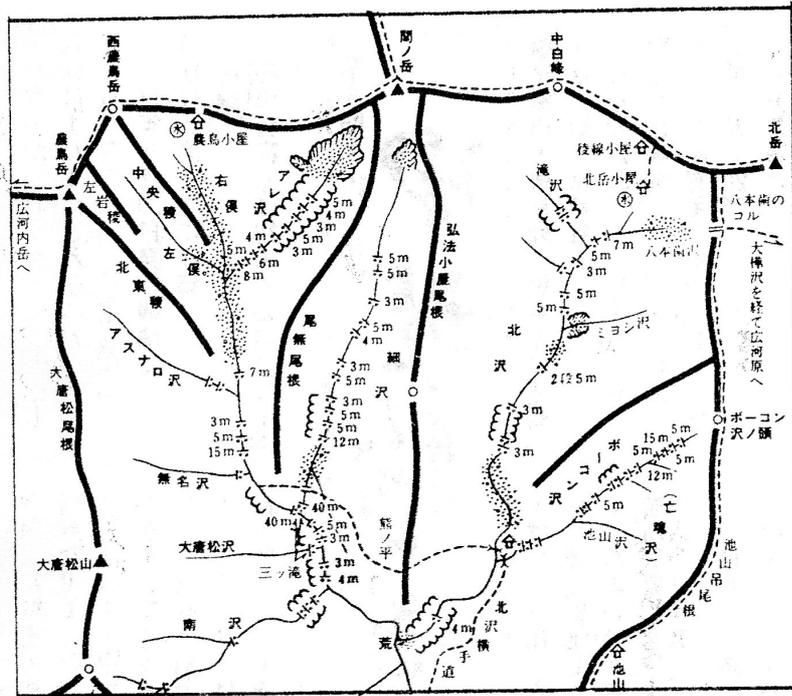
1月1日(風雪) マイナス20度
へタイム 起床1:20 出発(農鳥岳) 4:15 〃BC6:15 〃出発
7:25 〃間ノ岳9:35 〃稜線小屋
11:40(泊)

少し良い方向にいつていると思つた天候は全く回復していな

かった。相変わらず外は猛烈な吹雪である。今日の予定は農鳥岳に登り北岳に向かい行ける所までである。毛利の意見で元旦なのでラーメンのタレの味付けで雑煮を食べる。大変うまかった。夕べの打合せで4時に農鳥に向かうべく3時55分に雪洞を出るが、杉澤のアイゼンバンドが不具合で15分遅れる。山口は足が痛むと休養。

小屋より少し登ると三峰岳方向よりもすごい風が吹く。白峰三山の中でもここは特に風が強い所だ。途中、悪い所を越えて短時間で西農鳥岳着。農鳥岳は中止して下山。まだ真っ暗の中、後藤がトップでいくが2、3回道を間違える。テントにあまり早く帰ってきた私達を見て山口はビックリ。もう少し寝ていたかっただか。

風雪の吹きすさぶ中、テント撤収して間ノ岳に向かう。今日は、できればポーコンの頭まで行きたいが、この天候と、入山3日目疲れがピークと考えると稜線小屋泊まりになるかもしれない。しかし、もし稜線小屋が開いていなかったらどうするか。危険なことだ。間ノ岳まではそうきつい登りではないが、だから長く風が強いので閉口した。天候は依然とし



で最悪で、間ノ岳に着く頃はますます険悪で暴力的な風が吹きまわってきた。

この登りで毛利、杉山がだいぶ疲れた表情をみせる。少し心配になる。稜線小屋まではほとんど夏道を行く。中白根で稜線小屋が見えると疲れていた毛利、杉山も少し元気になる。冬山は低温、低圧、強風でやられる場合が多い。毛利

は長いマツゲに氷が付着して丸くなり重みで前が良く見えないようだ。小屋は無人で開放され、すでに20名位入っていた。

暗い小屋の中で「ゴト」と声を掛けられたので目を凝らして見ると以前「沼津山の会」で一緒だった黒沢だった。中に入りとりあえず一服する。あの風から解放されただけでもひと安心。タバコが実にうまかった。皆で

熱いラーメンを食べたら、先程までの苦しい登行はウソの様に軽いジョークも出る。今山行で一番キツイと予想した所が終わり私もホッとした。

15時より夜叉神隊の竹端らとトランシーバーで交信するものの、受信が上手にいかなかった

(向こうには

届いていたらしい)。16時の天気図は昨日と変化がなかったが予報では高気圧が張り出し、冬型になってきたとのこと。淡い期待をいだいた。

1月2日(快晴) マイナス18度
 ヘタイム 起床2:00 出発5:
 30 北岳肩7:00 北岳7:20
 北岳肩7:30 八本歯の頭8:
 45 砂払いの頭10:15 池山小屋
 11:30 あるき沢橋12:30 荒川
 橋13:10 三島18:30

シュラフの中で目を覚ますとけっこう寒かった。外に出た人に天気を尋ねると一言「快晴です」の返事。皆を起こして朝食の準備をする。今朝も野菜と肉がタップリ入ったオジヤだ。今回このオジヤが大好評で(もっともこんなものしかなかったが)おいしく何回もお代わりした。流動食で食べ易い。

朝食が終わると一番辛いキジ打ちだ。先に済ませた杉澤の話では下からの吹き上げが厳しいとのこと。以前読んだ本には冬は硬めの物をコロッとやるとあったが仲々そううまくはいかない。

北岳の頂上で御来光ということ少し遅らせて小屋を出る。稜線

に出ると相変わらず風は強かったが雪が飛ばされているので道は歩きやすい。そして東の空が静かに明ける。山口が「アッ」といって小屋に8ミリの忘れて来たことを皆に告げる。もったいないので山口は踵を返して取りに行く。私達はなるべく風の来ないところで待つ。実に寒かった。目の前にはすでに足下になった弘法小屋尾根がスーと美しい稜線を東に伸ばしている。ああ、とうとう私達はあの尾根登ったのだ。

北岳の肩から頂上は簡単に達した。皆で記念写真を撮ったり石を拾ったりする。下りはアイゼンの片方ない杉山が苦勞する。再び肩に戻り下山開始。砂払いの頭で清水山と会い歓談。彼らに荷上げ品を進呈することにした。(結局あちこち掘って見たが分からなかったらしい)ポーコンの頭を越えヤッケ、オーバーズボン、アイゼンを脱ぐ。風もなく穏やかな日であった。全員に笑顔がこぼれる。私はここまでくれば大丈夫とホッと少し疲れを感じた。長いようで短かった76年冬山合宿。私は下山しながら、いろいろのことを考えていた。会全体で、皆で力を合わせてこれだけの成果が得

られたのがうれしかった。しかし、私達はまだまだこれからだ、もっと、もっと……。(文中敬称略)
(77年9月20日発行機関誌「くろゆり」第3号に収録)

解説

冬山合宿では初めてのバリエー

ションと縦走の取組みだったが、周到な準備と若さで成功させた。パーティーの平均年齢は、毛利さんを入れても何と！30・4歳だった。それ故、転落、歩行中のアイゼン紛失、荷上げ位置不明など、初歩的なミスもあった。

第5期冬山合宿

2966m

甲斐駒ヶ岳

後藤 隆徳

●釜無川→横岳峠→鋸岳→甲斐駒ヶ岳→駒ヶ岳神社

▽77年12月30日～78年1月2日

▽C.L後藤隆徳(30) S.L杉澤康秀(28) 記録毛利哲也(44) 医療大橋 孝(20)

「とりくみ」

- 1、77年8月22日～23日に後藤隆徳、大橋 孝は角兵衛沢より黒戸尾根を偵察する。
- 2、77年10月7日～8日に後藤隆徳、今井芳明は釜無川より横岳峠をへて2670m峰まで荷上げを行う。
- 3、77年10月8日～10日に杉澤康秀、毛利哲也、今井芳明、杉山達は角兵衛沢より黒戸尾根の偵察と荷上げを行う。(山口 清が荷

上げに参加出来なくなったため今井が連続参加した)

4、77年12月30日に桂田昌徳は釜無川林道終点まで車でサポートした。

12月30日(晴)

- ▲タイムV下土狩7:00→釜無川林道終点11:15→出発12:55→保勝小屋14:00(泊)
- 6時半下土狩駅に向かうとすでにサポートの桂田が待っていた。「何をしている？」と尋ねると「皆を待っているんだよ」と答える。「毛利さんは三島から歩いてくるのかなあー」などと言っている。どこかで連絡ミスがあったようだ。すぐに三島駅に迎えに行ってもらおう。やがて杉澤が現れ、大

橋も御殿場線で降りた。そして出発。見送りは杉澤好子のみ。天候はマアマアだ。桂田のバイオレットは246号線を通り籠坂峠を越え、山中湖を通過して御坂峠にかかる。料金所で「下のほうで事故があったので注意して下さい」と伝言がある。しばらく行くと、6台がメチャメチャになっていた。下り坂の急カーブが凍結してた為らしい。車は20号線に出て釜無川に向かう。左手に鋸岳の稜線が続く。釜無川の林道は、秋よりひどく荒れていた。途中で野生の猿の群れを見る。終点の中ノ川出合に着く。全ての荷物を降ろすと桂田は手を振って帰っていった。腹ごしらえをして出発しようとした時大橋が「アッ」と言った。またやってしまったのだ。テントのポールが無いのである。大橋の話では下土狩の駅では確かに有ったとのこと。きっとトランクの中にあるのだろう。今山行は、ポールが無いと少し困る。桂田がチェインをはずしてトランクに入れる時気がつき、戻って来てくれるだろうか？いろいろ考えた末、今日の行程は時間の余裕があるので、出発を1時間程遅らせて杉澤と大橋で車を追ったが良い結果は得られ

なかった。(後で分かったが、やはり桂田はチェインをトランクに入れる時ポールに気が付いたそうだった。しかし、またチェインを付け直し戻す気にもなれず、またポールは不要なもの判断したそうだった。)とにかく我がパーティーは今年もまたポールなしのテントを持っていくことになった。小1時間釜無川をつめると保勝会の小屋に到着。大橋持参のオールドで軽く前途を祝い早々と休む。冬山としては大変暖かく明日の天気も心配だった。

12月31日(雨)

- ▲タイムV起床3:30→出発5:00→小屋戻る5:20→再出発11:10→横岳峠12:40→3角点ピーク(2607m) 15:30→テントサイト16:00(泊)
- この釜無川上流の保勝小屋は屋根と壁はトタン張り、骨組みは唐松の丸太でできた簡単なものであった。以前は立派な建物だったのだろうか、回りには大きな丸太などの残骸が残っていた。大きさは4人が横になれば一杯になってしまう。ただ入口の所が土間になっているので焚き火などはできる。夜暖かいと思ったら、朝方より雨になった。トタン張りな